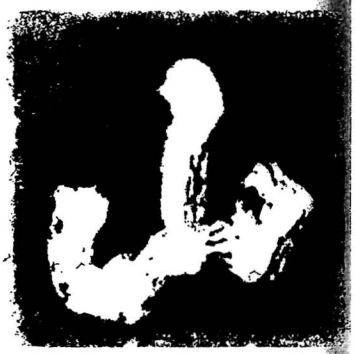
定価一部100円
第304号　昭和45年10月10日発行（毎月10日発行）



昭和45年（1970年）
10月号（No. 304）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

本文
万博会場における講演…ヒラリー… 1
下界のヒラリー夫妻…… 4
高山から浜松まで……吉沢一郎… 6
冠松次郎氏を悼む……岩永信夫… 7
御会葬ごあいさつ……冠　郁夫… 7
会員通信
クリンデルワルト晩夏…松方三郎… 7
立山登山……岩永信雄… 7
利尻山に遊ぶ……川喜多壮太郎… 7
小笠原母島の山歩き……森谷虎彦… 8
三度目のテルブス行……近藤　等… 8
図書紹介
日本山岳志復刻版…… 8
ＡＬＰＳ…… 9
図書室便り
図書受入報告…… 9
定期刊行物受入報告…… 9
８月到着外国雑誌…… 9
洋書受入報告…… 9
地図受入報告…… 9
会務報告
９月理事評議員会…… 9
会員異動……10
ルーム日誌……10
昭和45年度除籍者……11
スミス女史歓迎会……11
新入会員……11
富士登山技術講習会……11

万博会場における講演
国際スライド講演

I ……E. P. HILLARY・
——*July 19, 1970*・

◇

皆さん、ここ大阪で皆様にご挨拶する機会を与えられました事を大変光栄に存じます。

皆様は既に日本並びに他の国々の優れた数々の講師から、人類の進歩と調和というテーマを中心としたお話をお聴きになった事と思います。

実はこの二〇年間に私は、国際的な協調というものに対して、いささかでも貢献出来たのではないかと思われる仕事に没頭して参りました。

この会場で私は皆様に対し、立派な学問上のお話も、深遠な哲学といったようなものも申上げることが出来ませんので、ややお粗末ではありますが、私の今までの人生について少しばかり申上げますので、しばらくご辛抱願いたいと存じます。

（注・これからカラー・スライドが始まる）

（一）

私は五一年前、世界の巨大な工業センターの喧騒から遠く離れた、南太平洋の小島、あの美しい、そして平和なニュー・ジーランドに生をうけました。（注・一九一九年、七月二〇日、オークランドの南三〇キロにあるPapakuraで生れた）

（二）

そこで私の父は小さな田舎新聞の主筆をやっており、母は学校の先生でありました。

われわれはオークランドの南六四キロに当る村で、小さな農業をやって暮しておりました。私は田舎の子供として大きくなりましたが、小さい時から農業の手伝いを始めました。

（三）

大不況時代のわれわれの生活は大変苦しかったので、両親は私を大きな町の立派な学校へやるには、並でない苦労をしたようであります。オークランド小学校というのは、ニュー・ジーランドでも有名な学校であります。

（四）

今から三五年前、ニュー・ジーランドの教育制度は慎重ではありましたが、どちらかと言えば狭量でありました。ヨーロッパ人とマオリー、この二つの種族集団は可なり幸福に共存しておりました。——あの左手にいるのが私の娘で、そのそばにいるのが、学校友達のマオリー族の一人であります。

われわれは、ニュー・ジーランドというところは、世界で最も恵まれた国だと教えられ、そう信じておりました。そこで私は、フランス人やアメリカ人、そして又日本人として生れた人々をさえ、とても不幸な生れ合せの人々だと気の毒に思ったほどでした。

（五）

家の暮し向きが少し楽になった頃、一家はオークランドの市の方へ引越しましたが、両親の新らしい家の居心地はまあまあというところでありました。私が期待していたのは、食べたい時にいつも充分に食べ物があり、病気になったら直ぐ医者が呼べるということでした。

（六）

少ない人口と豊かな土地をもつニュー・ジーランドは、いろいろの点で幸運な国であります。

勿論私は、何百人という人々が貧しさや飢えに苦しんでいることを知ってはいましたが、それらの人々は何千キロも遠くに住んでいたので、それらを実感として感じることは難かしかったのであります。

（七）

高等学校の最後の年に、私は初めて雪の山へ行きました。オークランドの南三二〇キロに当るルアペフという火山にスキーに行ったのであります。

（八）

それは私にとって愉しい経験でしたが、以来スキーと登山の両方が病みつきになってしまい、時間さえあれば山に親しむようになったのであります。

（九）

私は急速に自信を得、技術にも上達し、やがてニュー・ジーランドの北島にある火山の登攀を卒業してから、氷河や氷瀑やクレバスのある南アルプスの巨峰へと向うようになったのであります。

（一〇）

私は優れた仲間と一緒に、ニュー・ジーランドにある素晴しい山稜や峰頂で初登攀をすることが出来ましたが、ニュー・ジーランドの最高峰、クック山の南稜初登攀もその中の一つでありました。

（一一）

今日でもそうですが、当時はエベレストは言うまでもなく、ヒマラヤの諸山脈に何百とある未登の高峰は、若い登山家にとって夢にも忘れられない挑戦者であり、魅惑の的でありました。

そして一九五一年にわれわれ四人はどうにか金をまとめて、初めてヒマラヤへ行ったのであります。

（一二）

それが私にとっては、アジアというものとの最初の本当の接触でありました。私は何百万といるインドの民衆の存在に気がつきました。

私は豪壮な建物を訪れましたが、それによって真の貧窮と病気についての

片鱗を知ったような気がいたしました。道端の溝に死んだ人が横たわっているのを初めて見た時のショックは大変なものでした。

（一三）

私は平原から、段々になった山の斜面を通って登って行きましたが、冷たい、澄んだ大気を吸うのは気持ちのいいものでした。そこからは登られるのを待っている沢山の巨大な山々が見渡せました。

（一四）

そこにあったのは総て夢に見た通りのものばかりでした。――山の斜面を見ただけでさえも、そこは深紅の石楠石に被われているのでした。

（一五）

エベレストやその他の巨きな山においてその荷物運搬で既に有名になっていたあの恐るべきシェルパ達に会ったことは、何という感動でありましたろう。

この年の遠行登山も、その後二年続いた登山も成功裡に行なわれました。

（一六）

一九五三年の三月、私は英国のエベレスト隊に参加しました。そこで起ったいろいろのことは今ではもう昔語りとなり、その山での勇気と熟練についての新らしい物語りも近年多くの心躍る書物の中に書かれております。日本の登攀家達も今年、エベレストで大活躍をしております。

しかし、エベレストの登攀は私の人生を変えてしまいました。ここでその過程を再現したいと思いますのでその間暫らくご辛抱下さい。

（一七）

われわれはあの大きな氷瀑の麓、五二〇〇mの地点にBCを設けましたが、この氷瀑は残念にもその後に続いた多くの登山隊にとって悲劇の場所になったのであります。

（一八）

この氷場に安全なルートをつくるのには多くの日数が費されました。われわれは沢山の固定綱を張り、クレバスの上には木橋を渡し、氷壁には縄梯子を取りつけました。

今日の標準からすればわれわれの登山隊は決して大規模のものとは言えませんでした。登山隊としては一〇人プラス、テンジンで、その他に古強者のシェルパ、二〇人がおりました。

（一九）

われわれは西クームと呼ばれている大きな谷へ入り、網の目のような巨大なクレバスの間を行きつ戻りつして行きました。毎日新雪が降って、前の道を消してしまいます。

（二〇）

ヒラリーと一の越俯瞰

われわれはABCを巨大なローツェ・フェースの根元に近い六三〇〇mのところに建設しました。ここへわれわれは莫大な食糧、天幕用具及び酸素を運び上げました。

それから二週間というものわれわれは、せっせと斜面の上方にキャンプを作ったり、物資をあげたりしました。

（二一）

そしてわれわれはいつでも頂上攻撃の出来る態勢に入りました。テンジンと私が西クームから出発しましたが、それは重要な日でありました。

（二二）

われわれはローツェ・フェースの途中にある小さな棚に達し、小さなテントに這いこんで落着きのない、居心地の悪い夜を過しました。高所ではなかなか眠りにくいものです。

（二三）

翌朝われわれはノロノロとローツェ・フェースの上部を登っていきましたが、上の方は恐ろしく急に見えました。

（二四）

それから七九八六mのサウス・コルにある次のテント場についたのは嬉しかったのですが、そこは少しの愉しみもない寒い、そして吹きっさらしの場所でした。

（二五）

次の日は強風が吹きまくっていて一歩も動けませんでした。テントの中でちぢこまっていました。しかし翌朝は風が納まったので再び前進を開始しました。

重い荷物に喘ぎながらわれわれは徐々に、南東山稜に向って登っていきました。

（二六）

山稜は技術的には難しくなかったのですが、高度が力を削ぎました。前進にはひどく骨が折れました。

（二七）

どうやらとても疲れて来たので、いささか必死気味にテント場を探しはじめました。やっと見つけました。いい場所とは言えませんでしたが、まずは我慢すべきであったでしょう。

八二五〇m、われわれはその傾斜した棚の上に小さなテントを張りました。他の者は、これから心細い不眠に入る筈のテンジンと私を残して、サウス・コルに下っていきました。

（二八）

高い止まり木での夜は寒くて居心地の悪いものでした。朝の用意もノロノロしていて、スムーズにはいきませんでした。とに角やろうと決意しました。チャンスは今だけだと知っていたからです。

（二九）

徐々に、急な斜面で高度を稼ぎ、南峰預上の背稜に近ずいていきました。

われわれは一寸休んで酸素量を調べ、小量の食べ物と水をとりました。それから主峰の方を見ました。

（三〇）

頂稜は技術を要するように見えました。われわれは凡ゆる注意を払いながらその上をゆっくりと辿っていきました。ここではどんな失敗をしてもお終いになります。

（三一）

岩棚が出て来ました、これを攀じるのに全精力を注ぎました。足場切りが又続き、歩調は弛み、一層規則正しいものになっていきました。

われわれは最後の力をふりしぼり頂上へのルートを辿り、そして到々、エベレストの頂上に出ました。

（三二）

テンジンと私は幸運にも頂上に達しましたが、これは登山隊全員の力と支持による成功でした。

エベレストで成功したことは登山隊全員の人生を変えました。少なくとも私の人生は非常に違ったものになりました。

それからヒマラヤと南極への遠行が矢継ぎばやに続きました。私は南極点にトラクターを持って行き、ヒマラヤの谷々を一層探りました。

（三三）

一九六〇年に私はネパールに戻って、掴みどころのない雪男を探しました。われわれは山の斜面を強力な望遠鏡（勿論、日本製）で調べましたが、何も見ることが出来ませんでした。

（三四）

われわれがロルワリン渓谷の寂しい氷河で足跡を見つけた時には興奮し、早速これを石膏型にとりました。

（三五）

足跡はもっと見つかり、われわれはそれを写真にとり、寸法を測りました。この地域には本当に雪男が棲息しているものと思われました。われわれはその足跡を辿り、注意深く調べました。その結果、これらが二本足の動物のものでないことがわかってがっかりいたしました。

（三六）

事実それらは、極めて普通の動物、

ヒマラヤ狐の足跡に過ぎなかったのです。小さな足跡が融けてくっつき、大きな足跡になっただけなのでした。

（三七）

われわれがどんなに簡単に誤間化されるかを示すために、担夫の一人の足を写真にとったところが、その異常な足跡が雪男のそれと区別出来ないのがわかったのであります。

（三八）

われわれはシェルパ達から、確かに雪男のものだという毛皮を手に入れました。しかしわれわれにはそれが、東部チベットにいる稀少動物、青熊のものであることが直ぐわかりました。

（三九）

こんな訳で何を持って来られてもそれぞれに妥当な説明のつくものばかりでした。パンボチェ廟にあった骨ばった手も、結局は人間の手でした。

（四〇）

クムジュン廟にあった有名な雪男の頭蓋も、セロウと呼ばれるヒマラヤ羚羊の皮から作り上げたものでありました。

（四一）

この頭蓋はもともとは儀式用の帽子として作られたものと思われます。それにしても、何もそんなものはないのだということを証明することは殆んど出来ませんが、雪男というのは結局、神話上の動物だということになりました。

（四二）

一九六〇年のわれわれの主たる科学上の計画は、もっと堅実なものでありました。われわれの目的は高度が人体に及ぼす影響を調べることにあったのであります。五七〇〇mにあるこの雪に被われた渓谷に、科学的な研究所を建てようと計画いたしました。

（四三）

建設資材や道具類を人間の背中でこの高所に運び上げること、それは可なり骨の折れる仕事であります。小屋の部品が厄介な荷物であったばかりでなく、場所そのものが技術的にも難しいところなのであります。

（四四）

建物の組立は一日でやってしまわなければなりませんでした。あらしがやって来た場合のことを考えると、小屋を半出来のままにしておく訳にはいかないのであります。一部しか出来てない場合には潰されてしまうからです。

（四五）

われわれは夜明けから日が暮れるまで建物の平縁を組立てそれらを確かりボルトで締めてから、総てのものを雪上に安定させました。

（四六）

外部との絶縁も充分、土台も安定したこの小屋には、実験を行ないながらここで五ヵ月を過そうとする五人の生理学者に安全な生活が出来る設備がととのっています。

（四七）

小屋の一端に固定してある自転車は、遠行隊員の作業能力を調べ、それらの高度順化が進んでいるか後退しているかを示します。

（四八）

科学者達は一日の大部分を、その身体につけた索や管で、いろいろの機能を記録します。これは大して愉しい仕事ではありませんでした。

（四九）

何ヵ月もそういうぎごちない環境で暮すのはなまやさしいことではないのですが、なかでも風呂の湯を沸かすのは大変でした。でも仲間達は何でも気軽に片ずけていきました。

（五〇）

身体の訓練も忘れませんでした。五七〇〇mの高所で彼らは毎日スキーをやり、中には近くにあるこんな急峻な山に登る者もおりました。

（五一）

山の中でも最も素晴しい山の一つであるアマ・ダブラムに登れたことは、最大の収穫の一つでありました。最後のキャンプは上のフェースの雪面に掘り、それから私の登山隊は真直ぐ頂上に向いました。

（五二）

それから十年の間、私は探検や登山を心ゆくまで味わいました。私は又、ヒマラヤの住民達、つまりシェルパとも仲良くなりました。彼らの勇気、快活そして誠実さに感じいるようになりました。彼らは私をいろいろの方法で助けてくれました。私にもそのお返しに何かしてあげることがある筈だと思いました。

（五三）

シェルパの子供達に何か出来ないだろうか。彼らには通うべき学校もなく、病気になっても診てくれるところがありませんでした。そこでこのことで何か出来ることがないだろうか、と考えました。

そこで今現に私が非常にやり甲斐のある活動だと思っている仕事を始めた訳であります。

（五四）

アメリカで集めたお金で私はまず、三八〇〇mの高所にあるクムジュン村に、学校を建てることが出来ました。

アルミニュームの建物をその場所へ運ぶには大変な労力が必要だった訳ですが、シェルパ達が大勢で無料奉仕をやってくれました。

（五五）

一九六一年の六月にこれの開校式が行なわれました。その日は湿ったモンスーンの雲が周りに押し寄せていましたが、記念すべき出来ごととなりました。子供が四十人、ベランダの上に一列に並び、最初の記念写真をとりました。

（五六）

シェルパの子供達は覚えもよく、とても熱心で、学業も早く進みました。親達もよく応援してくれ、学校は忽ち皆の評判になりました。

（五七）

他の村々からも学校を建ててくれと言ってきました。労働の方は無料奉仕をするから、建設資材や先生の方の援助を頼むというのです。彼らはとても熱心でした。

（五八）

屋根は全部カトマンズから急な山坂を越えて運ばなければなりません――二週間以上の苦しい仕事になることもあります。

（五九）

学校が出来上って開校式が行なわれる時はいつも大事件になりました。これはチャウンリカルカの学校であります。

（六〇）

学校は一つ一つと出来ていきました。チベットとの国境に近いタミにも出来ましたが、ここの環境は荒涼としており、強風がいつも吹きまくっているところであります。

（六一）

今までは高い場所でしたが、今度はもっと低いところにある、澄んだ緑の村、ジュンベシにも建てました。

（六二）

建設資材をヒマラヤ山地へ運び上げることは、だんだん大きな問題になって来ました。どうしても小さな飛行場が必要になったのであります。

さんざん探し歩いた結果、ルクラ村のある山の斜面に平地を見つけました。

（六三）

われわれには機械道具もブルドーザーもありませんでした。手道具を使い、土は人間の肩で運び出し、到々ルクラ飛行場を作り上げました。

（六四）

こうして今や小さな飛行機でも、前には歩いて十二日もかかったところを、たった一時間で来られることになったのであります。

◇

この稿、続次号。少し長いが悠っくり読んで下さい。（訳・吉沢一郎）

槙さんとの出合い

室堂平にて

……下界のヒラリー夫妻……

庄川沿いの愉しい旅……

富山支部　石坂久忠

立山や剣岳登山の印象を胸にした人々と共に、特急〝むろどう号〟が富山駅についた。立山も暑つかったが、立山の下、富山の街も暑い。中田支部長、若林夫妻等が駅頭まで出迎えてくれた。立山ケーブル開通式を終えての帰りだった中田知事、前吉田知事らと握手を交わしてからヒラリー卿一行は県さし廻わしのセドリックに乗り移って早速小牧へ向う。貿易観光課の土肥さんが別のジープを操り、荷物を積んでそれを追う。

ジープの方はガソリンスタンドに寄ったり停電で生温たかくなっているコーラを飲んだりしているうちにセドリックは去ってしまう。心配していないだろうかと思ったりするがドライバーの土肥さんは安全に小牧ダムまで行ってくれるだろう。（二人のドライバーはともに土肥さんで私のよく知っている人々であった。）

有沢橋、婦中、長沢、安川などを経て小牧に向う。そこに着いたのは十六時三十分。三人を乗せたセドリックも少し前に着いたらしくUターンして帰富するところであった。（ヒラリーはセドリックのケアフル・ドライビングを褒めていた。）

関西電力乗船場事務室に入る。脇事務課長をまじえ、すでにご三人は雑談中であった。吉沢氏の言によれば外でジープを待っている間に喉が乾いたというので水筒のカルピスを出したらえらく喜んでいたという。

十六時四十五分　川流木の浮かぶ庄川湖水を静かにさかのぼる。四十分余りで大牧発電所の見える地点まで右に左に舵を操りながら進んで行った。冷気が、はやぶさ号に入ってくる。標高差は変らないのだが深山の味がした。私と土肥さんは終始船尾で、すずんでいた。ランチが速度をおとして接岸準備に入った頃誰れかの脚に大きな「アブ」が動く、すかさず叩きおとす。そうしている内にランチは大牧温泉の前を通過していった。窓から釣糸を垂れている人、裸体の浴客、水と緑のとりなすコントラストが美しい。白い水波は乱れだした。Uターンである。温泉客はランチに見入っている。一風呂あびた裸身の像が増え、珍客を迎えているようでもあった。接岸上陸、荷車（大八車）があった。荷物をつけてサッサと大牧温泉ホテルに入る。

夕食の時刻になってしまっていたが、何にかと世話している間に時間が過ぎる。風呂の準備に村山さんが行くと虫がいるという。どれ、私が行こうか、蜘蛛が巣をかけている最真中で仲々面白い。払いのけて栓をひねる。湯が出た。先ずご婦人からどうぞ……。

半刻待つ間もなくヒラリー夫妻も一風呂浴びて我々の部屋にくつろぐ。吉沢さんは身辺整理に多忙である。お茶を呑み羊かんを噛りながら雑談がはじまった。女中が入ってきて夕食にしましょうかと言う。早速夕げの食卓を囲み、鯉の刺身で旅情を味わう。ヒラリー卿は生のものはすかないらしい。でも夫人は出されている物、すべてに箸を入れ賞味しておいでであった。氷が溶けて卓の上に小さな湖水が出来、滝になって落ちる。暑いのだなあと思う。夫人は子供達や友人のためにと、ヒラリーさんに何にかとポーズを要求しながら撮りまくっておいでである。（アサヒペンタックスS・P、これは香港で買ったもの、とても安いらしい。）

〝ホントニアリガトウ〟　小牧ダムをいくヒラリー夫妻　吉沢撮影

さあ今夜は久しぶりに休めるときめたが、仲々眠れない、暑いのだ。廊下の通風のよい所を選んでみても駄目。露天風呂のベンチで寝ること小一時間、夜は白々と明けてくるようだ。湯治客がゾロゾロ入って来たので部屋に帰ったら吉沢さんが本の整理中だった。ヒラリーさんの著書、ルイーズさんの著書、ヒマラヤの地図、それにもまして旅行記の整理である。珍らしいサイン帖をみせて貰っているうちに夜が明けてしまった。

温泉の一夜もヒラリー夫妻にとってはどうであったろうか、異郷の夢は……。

又しても露天風呂に向う。すると廊下に通行止めの立札がかかっていた。先刻通った時にもあったのだろうかと疑問になる。私達一行の廊下はVIP（Very Important Persons）だったのだ。面白い。

二十五日九時十五分関西電力の特発ランチで小牧に戻る。祖山、下梨と舟の旅を計画していたのだが、舟の事情と道路のため小牧から細尾峠経由下梨入りと当初の計画通り下ることになる。

静かな朝の庄川人工湖を眺め、水鳥の案内もさることながら船足は軽い。昨日の色と変った風景である。静かな湖に、浮き沈みしていた川流木も風のためか姿を消し清掃された湖上を、朝の甘い空気を充分吸いながらジープの待つ小牧へと急ぐ。温泉客を乗せた船に出会う。お互いに手を振り合いながら遠ざかって行く。

十一時十分小牧につく。上田所長の案内でダム施設を見学、予定時間をすぎること小半刻、やっと発電所から開放され、十一時小牧をあとに井波へと向う。先ず役場に連絡をつけてくれたのが土肥さんだった。井波役場の係が「横山一夢さん」に案内してくれた。主人は上京中とかで不在、夫人の案内で一夢さんの作品を観賞、そして、お弟子さん達の作業振りをみて廻り、井波彫刻の一こまを知る。お二人とも熱心に見入っておられる。時にはフラッシュがひかる。別れを告げて瑞泉寺に向った。

時あたかも太子講中であった。露天商の屋台が並び、人ごみを分けて瑞泉寺の山門に着いた。立ち止まったきりである。山門の彫刻美に感嘆してのことか、善男善女の多いことにか、異郷での心情が通じてのことか？

先行して訪問手続きを終え待つこと10分、客室に通され、お茶と引き菓子が出される。珍らしかったのか大切にパックされ、私が役僧を通じて、もう一包所望する。太子講中のこととて管長も忙がしいなかを面接、役僧に伝言して去る。善男善女の中を静々と本堂、太子堂へと廻り宝物殿に向う。その時ルイーズ夫人の咳が気になった。赤十字救護所があったので面識のある看護婦さんにお願いして薬を貰う。もしアルギー性ではないだろうかと念をおされる。

宝物殿の見学は時間がかかった。善男善女で動けないのとヒラリーさんの目がこえているからだろうか、通訳にあたった人が苦労しているのが気にかかった。ネパールのものやインドのものと比べていなさるのか、それとも仏教徒におなりになったのかとも思う。村山さんが来てお布施をしたいと言われるがどの程度と申し上げようかと言う。役僧が事務所へ小走りに領収書を書きに行く。扇子等を持って帰って来た。時計は十二時を過ぎてしまっていた。昼食は相ノ倉部落の民宿勇助でとることにしてあった。

ジープは山合いの谷を走る、人喰谷である。時々ドライバーはスピードは

よいかという。彼も気になるらしい。この道を通ったのはドライバーと僕のみだ。雪のことを話し、郵便逓送隊のことを話しながら細尾峠についた。林間学校のバス三台停車中。勇助の前についたのは十三時二十分。平村の図書（ずしょ）助役さんが何かと面倒をみて下さる。ここも暑い。「またたび」料理を食い冗談を飛ばしながらの少刻、仏壇を開いてろうそくを燭す。電気ローソクである。山村生活の一面を知られたであろう。又和紙の原料や雪国の藁靴（ふかぐつ）、養蚕の桑のことに話しがはずんだ。特に筑子（ささら、こきりこという）が気に入ったことであろう。メロデイに合わせて五箇山の古今を偲んだ。

民俗館で雪国の住居と生活の実態、生活様式を見学、和紙原料「楮」（こうぞ）を土産に菅沼へと急ぐ。

十四時四十分合掌集落菅沼についた。遠くで雷の音がしている。夕立があるぞと思いながら原田氏の案内で「観光の五箇山」（8ミリ）をみる。三十分程の映画であった。四季の五箇山に理解を深め、合掌集落を撮ったりして十五時三十分赤尾についた。途中道路工事で十分余り停車、脚が不自由な

暑くてもこ気嫌なルイーズ夫人　YO

のか外に出て散歩するヒラリーさん。

荷物を今夜の宿、赤尾館に入れ直ぐ前の岩瀬家に向う。中学生で溢れている。夕立がやってきた。六日東京に着いて以来のお湿りだと話され、幸運な旅だったと話す。夕立の中を岩瀬家に入った。中学生はヒラリーさんといいながらサインを求めて集る。岩瀬家を一巡、三階まで足を運び、初めは学校でもあるのかと思ったらしいが林間学校の生徒達だと知って納得がいったらしい。代官部屋や、炉辺で小休止、夕立が晴れない。傘をかりて旅舎に向う。早速夕立雨で湿った衣服を取りかえ、夕げの食卓を囲む。

名古屋のマカルー登山隊員のつかいの者だという人から電話である。吉沢さんが電話口、そして私が出る。なるようにしかならない日程だが名古屋での特別日程を組んでくれないかとのことで吉沢さんも思案していなさる。

飛驒山岳会の平井さんから電話が入り、高山到着予定時間と高山での日程を相互連絡し合う。夕食後行徳寺に行き翌朝のお願いをする。心よくお引受けを願って旅舎に帰った。

五箇山民謡のデモンストレーションの交渉にかかると八時からしましょうとのことでその時間の来るまで雑談。隣りの駐在さんが植木の手入れ中である。

私は南極極点のことを尋ねるとヒラリー卿は詳細に説明して下さった（農用トラクター活用のこと、スペヤーのこと、エンヂンオイル等）。又、南極の雪に対しては Snow Cat がよいとほめることもわすれなかった。八時民謡舞いの時間となった。ルイーズ夫人はカメラをひっさげて会場へ。舞台の

西赤尾にて　ツンツルテンのヒラリー卿　YO

衣裳は外国人には異様だろう。

麦や菜種は二年で刈るが、麻が刈らりょか半土用に、烏帽子狩衣脱ぎうちすて、今は越路の杣屋かな。

麦屋の一節である。

踊りたか踊れ　泣く子はいくせ　ささらは窓のもとにある　窓のサンサもデデレコデン　晴のサンサもデデレコデン　筑子の竹は七寸五分じゃ　長い袖のかなかいじゃ

筑子節の一節である。古代神、こいちんさ等の舞を観賞して、林間学校のささやきも終った頃、五箇山での眠りについた。

明けて二十六日高山入りの日である。早朝に眼を開いた私は外に出た。ツンツルテンのゆかた姿のヒラリーさん、小男だての吉沢さんが岩瀬家の前でシャッターを切っていなさる。

ラジオ体操に集る部落の小学生、仕事に出て行く村の人、海水浴に急ぐマイカー族、五箇山も年々変化し文明の波と過疎の世相は急速にやって来ていた。

コース変更をしようと思うと吉沢さんに告げる。白山遠望のため天生峠に登ると言えばヒラリーも喜ぶことだろうと賛成。

行徳寺で道宗の歴史をきき、昭和二十八年バーナード・リーチ氏が訪れていたことを前夜ヒラリーさんに伝えておいたためか訪問帖にサイン。ここでのサインが面白い。ジュネバ・スパーやサウスコル、エベレストの線がでる。アイスフォールの曲線も又美しく書いていく。お茶をいただき十時行徳寺を去り天生峠に向う。ジープを押さなければならないかと冗談を言いながら一四三〇mの峠に道草をする。途中一台の車に出会い眺望具合を尋ねると、余りよくないとの返事、展望台までは無理と判断、峠付近の黒桧の繁みでUターン、小休止を入れて天生峠を去った。残念に思ったが白山は雲の間に姿をみせていた。ジープの中で山の歌をうたったり、山草の話しをしたり、楽しかった山旅を回顧したり、白川郷の集落を眺め、語りながら御母衣荘についた。中食のためである。

富山から電話を入れておいたランチである。その時トーストがないかと電話で言ったが、この山の中では用意出来ませんとの返事。五箇山で青豆に興味をもったルイーズ夫人が、この御母衣荘でそれを賞味することが出来た。

それから御母衣ダムに向う。先ずダム（ロックヒルダム）。そして発電所へと車を走らせる。予定時刻を少々遅れて発電所についた。東山次長の説明が続いたが、時々オイルスイッチの音がしてビックリする人もあった。青写真を拡げ、英文のパンフレットを参照しながら、時々質問を飛ばすサー・ヒラリーさんだった。専門的なことまで質しながら一時間余りで謝意をのべて一路高山へと急いだ。

ルイーズ夫人の父は植物学者だった。私の説明をよく聞いて下さったし、夫人もよく樹名を知っていた。

ある時、山石を積んだ乗用車が腹をつかえさせて難儀していた。盗石車だと知りながら助けてやる。ヒラリーさんも手をかす。湖水の水は清々しく、異郷の空には雲一つなかった。

長いジープの旅で脚の血行が悪いのではないのかと尋ねたが、なんでもないと元気な返事。車の中で午睡している御方もある。我々のリーダーはしきりに時間を気にしている。道路工事で交通制限をしていたのである。夏厩で三十分余りストップ。狭い通路を三列でつまっていた。

高山についのは十六時二十分だった。旅装を整え山岳展に案内される。私の知った人々の写真もあったが、ヒラリーさんは剣の写真がもっとあってもよいではないか、高山の人は剣に登らないのかと話していた。

旅館の部屋はまるで民芸館のようだと喜ばれる。夕げを終えて飛驒山岳会の歓迎会のある金亀館に向う。

元仲高山市長の歓迎の挨拶、飛驒山岳会々長の歓迎の言葉があってから興味深い記念品がヒラリー夫妻に贈られ、そのあと歓談と会員の獅子舞等を見せてもらってからおひらきになる。

二十七日、高山を去る日である。約束通り六時にイチロウさんに起され、朝市に向う。古い都京都のような街、高山、称して小京都という。街角で時々歩みを止めて街並を観賞するサー・ヒラリー。

帰宿してからお茶漬で朝飯をおえ、屋台会館で、神楽台、鳩峯車、大八台、金鳳台等の展示台を見学し、高山祭を連想しながら、日下部民芸館を訪れ、昔の生活様式を知ったのであった。

いそがしい日程を終えたヒラリー夫妻は次の目的地浜松へ……。九時十五分、電車で高山を離れていった。Our Leader, Mr. Ishisaka, Good-by。大きな手で私の手を握るヒラリー。私も又、一路平安を祈りながら眼頭を赤くしている汀子さんと二人で、いつまでも電車のあとを見送っていた。再来、再来、再次来、日本再見、再見。

EDとWHIZZIEとの旅
高山から浜松まで

吉沢一郎

一週間ものんびりとお客さんに従って旅の出来るのは私ぐらいのものなので、とうとう大阪から富山、立山、大牧、西赤尾、高山、名古屋、浜松までを私が引受けることになってしまったが、レディ・テルに言わせれば、「今度ヒラリー夫妻が来て一番旨いことをしたのはあんただわね」ということになるらしい。

確かに私もそう思うのだが、それを可能にしたのは、休むのを心よく許してくれ、なにかまで渡してくれた、うちの会社の山中社長（小島の六さんと渡辺ハムちゃんの親友でもある）や、富山の中田支部長、そして縁の下の仕事をしてくれた会員達のお陰であると思う。

七月の二〇日に大阪へ行き、二一日にはロイアル・ホテルのフロントに、「あした九時に来ます」という名刺を託して神戸へ赴き、津田君をはじめとする（四谷君も来てくれた）神戸の岳人達の案内で、最近出来た登山研修所を見学させて貰った。夜は又、北長狭通りの「江記」でご馳走になる。

二二日、八尾から電車とタクシーでホテルへ行く。九時少し前だった。万博テーマ課長の堀内宏明氏の案内で大阪駅へ。ホームにはもうテルさんが待っていてくれた。

九時四五分の特急雷鳥号。テルさん達に、では又、ということで暑い梅田の駅をあとにする。

いよいよ三人きりになる。沿線の田や畑が直ぐ眼の前を逆に走っていくのがうれしいらしい。深坂トンネルをこれが日本でも最長のものの一つだと説明していたら直ぐ明るくなってしまった。地図を出してなかったのが失敗のもとだった。

車内はガラ空きだったが、前に万博帰えりの一家族がいた。八王子の料亭「登喜和」の経営者だった。御主人はおっとりしているが奥さんの方は流石に仲々の外交家。忽ちエド夫妻と仲良しになる。写真をとったりサインを貰ったり、あとで何かいろいろ送ったら礼状が来たとてとても喜んでいた。

ダイナーへ行って中食、ビフテキOK、私は酒類を好まないので気がつかないでいたら、「吉沢さん、ビールを注文してもいいですか」といいにくそうに言われてしまった。煙草を吸わない人が灰皿を忘れるのと同じである。

やはりエド夫妻にとっては飛行機よりも汽車の旅の方が愉しいらしい。席にいても眼はいつも車窓の外に向けられ、何か典型的な日本はないかと鵜の目、鷹の目。

そして富山駅についた。中田さん、若林さん、石坂さん、村山嬢、そして富山の偉い人々大勢に迎えられてまず駅長室に入った。ここでも色紙が何枚か出されてきた。

（これから以後は中田、石坂、村山その他の方々の手記にあった通りなので私は別の方向へ急ぐことにする）

◇

表題にあるエドは勿論エドマンドのエド。彼自身はサー（卿）と呼ばれることを好まないようだ。彼は一九一九年七月二十日に、ニュー・ジーランドはオークランドの南東四十キロにあるパパクラ（Papakura）という小さな町で生れた百姓であることを決して忘れてはいないからである。

ウィジーは奥さんルイーズの仇名である。身が軽く、何でもアッという間にテキパキと片ずけてしまうかららしい。エドよりは一廻り下の三九歳。脚力は今では奥さんの方が上である。

私の仇名は何だというので、今はウルサ型（fastidious）といわれているらしいが、昔はベアだったというと、さもありなんといった表情でうなずいていた。立山で彼が私にくれた尊称はシェルパ・サーダー、これも洵に適切である。

飛騨山岳会（高山）での歓迎会

本当の意味の山男に、Why do you climb mountain? なんて問いただすヤボさを私は近頃反省し始めているのでそんなことは聞かなかったが、山が好きでそれを心からエンジョイしている彼を私は立派だと思った。

◇

地図をよく見たり実際に旅をしてみて、それまで持っていた概念と余りに違うのでびっくりすることは度々あるが、今度の旅行で高山（大昔ここから上高地へ行ったことはあるが）が、日本海と太平洋の分水嶺上にあり、富山へも松本へも殆んど同距離（六〇キロ前後、東京—小田原間）であることに気ずき、下呂温泉の直ぐ裏に御岳の三浦（みうれ）ダムが控えていることを再認識した。洵に旅というものは有難いものである。

◇

高山を出る時は特急の三等車（指定席）であったが、親切な車掌さん（ヒラリーということを知っていたらしい）のお陰でグリーン車に移ることが出来てホッとした。

下呂温泉、集中豪雨でのバス転落場所、日本ライン下りのこと、犬山城などの話しを窓外を見ながら語り合って行く。

電話で打合せが出来ていたので名古屋へついたら伊藤洋平、原真、NHKの白井久夫その他の方々が待っていてくれた。

名古屋の街も久振りだったのでその変りように驚く。洋平氏は六年の滞米経験があるので立板に水の如くに喋べりまくる。そして古風な料亭「八雲」?の二階に案内された。

放送局のスタジオに入ったようにTV用のカメラその他がすっかり用意され、コードがあっちこっちに這いまわっていた。

ここでの大型ビフテキにはヒラリーもご満悦だったようだ。そして今年度のヒマラヤにおける最高の評価を、JAC東海支部のマカルー南東稜の登攀に置いた時、ホスト達の表情もこれ又ご満悦そのものであった。

私は一九六八年に酸素なしのエベレストを主張して誰にも問題にされなかったが、ヒラリーも南峰が八八四八mだったらあるいは可能であるかも知れないが、問題は南峰から主峰への往復部分にあると言っていた。それは確かに言えると思う。

約一時間半の歓待をうけたあと、再び名古屋駅に戻り、洋平氏に不足の切符を買いに行ってもらったりして、無事新幹線の車におさまる。

車中ヒラリーが新幹線のことをブル・トレインというから「牛列車」ではおかしいと思ったら、それはブリット（bullet, 弾丸）のことであった。

名古屋から浜松までが余りに短かかったのでヒラリーもびっくり、私もびっくり。ホームに降りたら誰もいない。赤帽もいない。仕方がないから重い幾つもの荷物を三人で手分けしてエッチラ、オッチラ駅の外まで運びおろす。

タクシーを呼んで荷物を入れかけたところへ佐藤テルさんと鈴木郭之君が現われた。これからのことはテルさんが書いてくれたので私はここで打ちきりとする。

◇

東京へ戻ってからも色んなことがあった。スキー隊での招待、JACの如水会館でのリセプション、NZ大使邸での小ディナー（ここではテルさんをハラハラさせた事件もあった）。神原、テル、鈴木の三君は都内の案内を買って出てくれた。

そして八月三日朝九時、二人は羽田を去った。横浜のSさん、テルさん、鈴木君、そしてシェルパ・サーダーの私、都合四人が見送った。これが最後でないようにというと、一九七二年の二月には子供も連れて必らず来ると固く手を握りながら約束した。

税関の方へ曲るまで、二人は幾度も振り返えり振り返えり、片手を高くあげていた。飛行機で二人きりになったら急に淋しさがこみ上げてきた、とあとから来た手紙に書いてあった。

皆さん、有難うございました。

冠松次郎氏を悼む

岩永信雄

冠さんが昭和四十五年七月二十八日午前七時三十分老衰のため眠るが如く安らかに米寿を完了して長逝された。幽明境を異にしてしまったので最早や君の姿や面影は写真の他では見られなくなった。哀悼の意を表するものである。

私の山の先輩であり、また親しい山の仲間であった人を失ってしまった。これでさきに別宮さん、沼井君と別れついに最後の一人を失って茫然自失非常な寂しさを感じる。

私が冠さんに私淑したのは大正の初期で、そのころ氏は盛んに秩父の渓谷を歩かれておられ、私も諸先輩に啓発されてこの方面に足を運んでおり渓谷の美を体得した一人であった。それで私が秩父の七つ釜付近を歩いたのを知られて、ちょうど冠さんが山岳会の小集会の当番幹事に当たられた時に、この旅行の話をしてほしいと依頼され、未熟ながら拙話をしたことがあった。

その後日本山渓美に魅惑せられて黒部渓谷そのものを探って見たいと思っておりようやくその機を得て大正十三年夏に冠さんと同行し、越中の宇治長次郎君らの山の仲間と共に黒部下ノ廊下を大ヘツリまで下り、前進を阻まれ、引返して内蔵の助沢を溯り立山から立山川を伊折を通って帰ったのが最初であった。越えて大正十四年夏には沼井君ら三人で鐘釣から下ノ廊下を溯り最初に完全溯行した時の感激は、共に後々までも忘れ得ぬものとなった。一応は本流はまずおいてその後は剣沢大瀑布到着を志し、昭和二年夏別宮さんら三人で久遠の大瀑布直下まで到着した印象はまた格別でいつも氏と会うときには想い出を新にして興奮し現在に至っていたのであった。

冠さんが山登りをされたのは明治三十五年頃からで、黒部の流域に足を進められたのは四十四年であるが、登山人の入らなかった黒部を探られたのは大正七年の夏からであった。爾来一年を通じ春夏秋と細部にわたって跋渉されること三十数回に及び、最後は昭和三十七年夏八十歳の高齢で下ノ廊下を歩かれたのである。登山界においても冠さんといえば黒部、黒部といえば冠さんといわれるほどで、一生の大部分をこの方面に傾到されたものである。

氏はお若い時から健康で無病息災であったが、八十歳を越えられてからは急に身体の衰えを感ぜられ、最近では足腰も不自由になられ、疲れたときには寝床に入られて身体を休まれ読書執筆され、床中にあっては考えたり、追憶にふけられ、文字通り静かな生活を続けられておられた。その間過去六十余年の山旅の都度書き綴られた紀行随筆その他をまとめて最後に「山渓記」五巻を刊行された業績は、全く他の追随を許さない決挙であったと信ずる。

氏の長逝に際し山崎君の求めに応じて追憶の一端を記しあわせて御冥福を祈る次第である。

（昭和四十五年八月十三日）

御会葬ごあいさつ

冠郁夫

父松次郎死去のさいは御会葬下さいましたうえ御香典まで賜わりありがとうございました。おかげさまで葬儀、告別式ともとどこおりなくすみましたが、告別式当日は十分ご挨拶を申し上げる時間もなく、お詫び申し上げる以外にありません。山岳会には父の生前大変お世話になりましたうえに花輪をいただき感謝しております。

父は六月十日ごろから床につき、四年ほど日本を留守にした私の帰国を心待ちにしていたようで、六月末私の顔を見たあとは、すっかり安心したのかあまり食事をとらなくなり、七月二十八日朝、苦しむこともなく眠るように息を引き取りました。最後まで山と、山を通して知りあった方々との御交誼を偲んでいたようでした。

生前の御厚誼に心からお礼申し上げます。（八月二十七日・山崎あて）

会員通信

グリンデルワルト晩夏

松方三郎

ウィーンとジュネーヴに用事があったので、ことのついでにこの二つの地点の中間にあるグリンデルワルトによってみた。一年振りである。

エミールの親爺は大分ぼけた。それでも今年はぼくであることがわかっただけましだ。去年はおしまいまでトンチンカンだった。つまりお互い、年をとると昔のことはよく憶えているが、昨日今日のことはすぐ忘れてしまう、という奴だ。ラ・メイジュの尾根で雷に会ったこと、エーグルの山小屋におりるのに新雪に悩まされたこと、ラ・グラーヴの宿に着いたときは、みんな濡れ鼠だったこと、夜明け前のアルジャンティエールの氷河で大難渋したこと、ヴェッターホルからフーネグッツの氷河に逆落しに下ったときのこと、メンヒのノルレンのこと等々、昨日のことのように話すから、さぞかしわかっていると思っていると「あんたはヘル・マツカタの弟かね」なんていう。「冗談じゃない、そのマツカタだよ」といくらいっても判らない。とにかく要領を得るのに十分はかかった。今年で八十二、相当な年だ。

ザミは夫婦で夜に訪ねてくれた。この方はすこぶる元気、槇さんの時代のファウルホルンの麗人、髪は真白になったが、一頃と違って、すっかり元気になった。田口一郎の墓にお詣りしたら、赤い花がきれいに咲いていたが、ザミ夫人が手入れをしてくれているのだそうだ。一郎兄弟は、ザミのおふくろさんには子供のように可愛がられていたが、今ではザミの女房があとをついで、一郎の墓守りをしてくれているわけだ。

町を歩いてみると、やはり一年の間にいくらか変っている。アードラーは木造シャレー造りを潰して二〇〇ベットの新式ホテルになるのだそうだ。甚だ遺憾にたえないと誰もがいうのだが、何ともならないらしい。この前は行ってみなかったので、今度はキスリングの店を訪ねてみたが、キスリングの名は消えていて、電気器具を売る店になっていた。彼の名は日本にだけ残ることになるだろう。

わが「駅前旅館（ヘルミヤス）」の方は老夫婦今秋引退、末息子のペーテルが代る。ペーテルがお嫁さんをもらったら、マネージャー格のフリーダおばさんも引退する由。マルタ夫人の愛犬も、もちろん一緒に隠宅のシャレーに移る。

来年はミッテレギー初登五十年ということになる。山は変らないが、人間社会には、やはり相当な移り変りがある。「五十年経ったなどと、まるで嘘のようだ」とザミは感慨深そうだったが、当時の五人組の中では、今となっては槇さんとザミだけが健在であるわけだ。

エベレスト・グラフ発売中　毎日グラフ・エベレスト特装版をルームで発売中です。全隊員署名入り。千円。

立山登山

岩永信雄

故冠さんの追悼文、字句の誤りなど適当に御訂正のほど願い上げます。

今度剣岳にお出かけの由、天候など如何でご座いましたか。私も八月三日朝東京出発、老妻と共に黒部渓谷を樽平から祖母谷温泉まで参りました。また富山から室堂、一ノ越をへて立山に登山。帰途小見の昔の山の仲間の宿に泊り、存命中のものと心ゆくまで昔話をし久し振りに楽しい旅を致して参りました。途中雨にも会わず愉快な旅をしてきたことを御一報申し上げます。

（八月二十五日・山崎あて）

利尻山に遊ぶ

川喜多壮太郎

深田さんの「日本百名山」の表紙うらの地図で登った山を数えてみたら、四十九ありました。五十番目を一番北の利尻山へ登ってやろうと、ちょうど迎える六十六歳の誕生日に出かけて行きました。北海道を知らない家妻は、山の高さも知らぬが仏でついて行くといいますし、気の置けない仲間の村尾金二さんも同行されて、とにかく、快晴の利尻富士を登ってきました。

実に美しい山でしたが、ここも、小屋は、屑物に加え残飯まで捨てられていて、これでは熊に食われるのも当り前だと嘆きました。山の会も登ることの前に、捨てないことを指導して欲しいと話し合いました。

また、眺めのいい七合目まで、スカイラインが計画されているとききました。道が余り長いので、途中断念する人もかなり見ましたから、一案かも知れませんが、どうしてもやるなら、山をこわす自動車道はやめて、せめて、

リフトに変えて欲しいものです。ヨーロッパ・アルプスのように、肩の見晴台にとどめれば、双方我慢出来ると思うのですが。

帰りに、札幌で村尾さんと別れてから、支笏湖によりましたが、ここで湖畔道路の自然破壊を見て、交通は船だけで充分じゃないかと思いました。

旅の最後は思いつきで有珠岳に行きましたが、ここは中腹までケーブルがついていたので、利尻山では「こんな大変な山とは教えないで、だまされた」と、足を引づっていた人も、喜んで登ってきました。

小笠原母島の山歩き

森谷虎彦

真冬の一月下旬に小笠原に行く機会に恵まれたので仕事を兼ねて母島中央部の小山脈の縦走を試みた。世はあげて高山氷壁の直登に熱中している時、海抜標高四六〇mの山登りは散歩の域を出ないかも知れないけれど、母島の山歩きは日本に残された誠に数少ない秘境の山歩きと言っても決して言い過ぎではないと思う。現在母島に定住人口はいない。西海岸の沖港に村営簡易宿泊所が一軒あって、用事のある人が父島の村役場で鍵を借りて来て使用することになっている。私は同行の学生さん一名とこの沖港から漁船に乗って南海岸を廻って東海岸に出て、島沿いに北上して、東湾で船をおりた。東湾は切り立つ崖で、母島の脊嶺山脈はこの東湾沿いに南北に走っているので崖の高さは三〇〇mにも達している。崖の一ヵ所が切れて石灰岩のガレ沢となっている所を選んで登りにかかった。いくらも登らない内にパパイヤの樹を発見。塩色にじゅくした実がなっている。早速樹をゆすって落して熱帯果実に舌づつみを打つ。パパイヤは本土に移入が禁止されてるので、この実をたべると日本本土を離れたと言う実感がわいてくる。更に登高を続けると野生のパパイヤの木が次々に現われるが、じゅくした実は野鳥がつっつくと見えて青い実ばかりである。

ガレ沢を登り切ると熱帯性広葉潅木林となる。この母島は戦後無人島化してしまったので山に道はない。ジャングルの中を鉈を片手に汗をふきふき進む。一月と言うにこの密林の中はむんむんする程暑い。ただ有難いことにこの亜熱帯の母島には大型動物もいないし、蛇と名の付くものは一匹もいない。間もなく主山脈の稜線に出る。人跡未踏と思ったけれど残念ながらかすかな鉈目とテープの目じるしが所々にある。返還後一年半以上もたっているので多少の調査は行なわれたのであろう。しかし山の中で人に出会う可能性は全くない。

現時点でこの母島に生棲している人類は私達のパーティ十名だけで、私達の他の八名は沖港付近で仕事をしている筈であるから。

主山脈の稜線を南下する。左は切り立った断崖、右は潅木の密林で、その彼方に亜熱帯の海がギラギラ輝いている。稜線上の所々に樹木のない一見草原のようなところがある。草付に腰をおろして一休みと思って行って見るとこれが悪名高きツルタコノ木の密生帯で、一度この中に踏込むと手足にタコの足のような樹幹がからみ付いて動きが取れなくなる。こんなところを何ヵ所か悪戦苦闘のすえ通り抜けてなおも南下すると程なく母島の最高峯乳房山の頂上に達する。頂上には僅かばかり開けた所があって殆んど全島が見渡せる。東海岸を見ると目のくらむ程の絶壁の下に紺碧の海がある。西と南には足元からゆるやかな尾根が海辺まで続いていて、その彼方には小島が点々と輪のように連っている。昔日本連合艦隊が泊地として利用していたと言われている。

かすかな尾根すぢの踏跡もこの乳房山までで、調査に入った人達は殆んどこの頂上よりコースを西の尾根に取って一気に沖港に降るらしく、西尾根にはかなり明瞭な踏跡があるが、南に向っては少しの間続いて、まもなく消失する。私達が乳房山に達したのは暗くなりかけてからだったので西尾根の踏跡をたどることにした。しばらく下降するとカヤ尾根に出た。昼間であればさぞ快適な降りなのであろうけれども今は闇に追われて超特急で降る内に遂に踏跡を見失ってしまい、シャニムニ沢を降って、沖港より北港に通ずる旧道跡に出て、始めて降った沢が沖港の一つ北側のコーモリ谷であることを知った。強行の一日を終って沖港の村営簡易宿泊所に着いたのは夜もかなりふけてからであった。

所で過密・公害国日本で、しかも東京都内にかくも原始の楽園が残っているのはそれなりの理由がある。即ち小笠原諸島は現在入域規制措置が取られている。旧島民でさえもが自由に帰れない状態にある。諸島への交通は都がチャーターした貨客船が月二回往復しているがこれは非営業であって運賃は取らないが都が必要と認めた者―主に都職員と建設工事関係者―以外は乗船お断りなので、観光登山釣が目的では乗せてもらえない。宿泊施設も村営簡易宿泊所が父島母島に一ヵ所あるだけで、それも常に満員の状態で民宿、旅館等は全くない。

三度目のアルプス行

近藤等

東京はまだ残暑がきびしいことと思いますが、その後もお元気のことと存じます。小生三度目のアルプスのシーズンを過しておりますが、今夏は一昨年の夏と同様、荒れ模様の天気つづきで、その合間のチャンスをねらうのに苦労しましたが、六本ばかり登山しました。このうち最初のアイガー東山稜だけは快晴無風、実にノンビリと楽しく登りました。一番むずかしかったのはエギーユ・デュ・ビオナセイの北壁直登（高差千二百mの氷壁）でした。

モンブランのブレンバ側は今夏もコンディション悪くついに夢に終わり、また出なおしです。来週には東京に戻らなければならないので少々ゆううつです。（九月四日・シャモニにて・山崎あて）

第13回もみじ会お知らせ

静岡支部主催第十三回もみじ会を次の要領で行ないます。希望者は東京の事務局までお申込み下さい。

▽期日　十一月十四日、十五日
▽場所　俵沢水月院（地図静岡市）
▽集合　十四日午後五時水月院（静岡駅下車、新静岡バスターミナルより俵沢下車、徒歩一時間、静岡駅より約二時間）
▽会費　一名二千円
▽たべもの　今回は手うちそば、生コンニャクのサシミなど
▽募集人員　JAC静岡支部員のほかは寝具の都合上二十名に限る。満員になり次第締切ります。申込者には支部から直接くわしく連絡します。

コンタミーヌ氏講演会

フランス登山学校教官A・コンタミーヌ氏の講演会が十一月十日（火）午後一時から東京朝日新聞講堂で開かれます。入場無料。同氏は十一月八日三峠岩登り、九日富士登山をします。

図書紹介

「日本山嶽志」複刻版

私は職業として図書館資料の受入の窓口業務をやっている。国内発行の出版物はすべて網羅するというので毎日ばく大な量の出版物が私のところに入ってくるが、この中に最近は雑誌や単行本の複刻が多いのに感心している。しかしその反面、複刻して内容を読むことが出来ればいいと思われるだけの安易な書物もあり、当初の原本の味や風格がそこなわれている上にあまりにも商業主義的な書物が散見される。

そこで山の本であるが、今度発行された明治時代の名著である「日本山嶽志」は価格、風格といいわれわれ登山家だけでなく、愛書家、歴史家にとって恵まれた書物といってさしつかえない。この書物は最近の古書価格の暴騰した状態では求めるには苦労するが、編さん者である高頭式と同郷である新潟県の野島出版が複刻を快諾され、その文化的事業として採算を度外視して原本の味をそこなうことのないように多大の努力を傾けて本書が刊行されるに至ったことはきわめて有意義であるといえる。

ちなみに同書の定価の四千八百円は私の計算では採算率ゼロとなる。私は出版屋でないので定価計算にはしろうとであるが発行に要した実費の原価はどのくらいで、製作費の計算法により定価構成は、おおよそ算出できる。そうなると私からいえば版元は篤志家になるわけである。この機会にこの稀覯本を一人でも多く読まれることをすすめたい。

この書物の意義や内容の解説、高頭式の人物評伝は同書といっしょに別冊

として越後支部長の藤島玄氏が要領よくまとめて便ならしめているので、いっそうこの書物の興味がわいてくる。装幀は深みのあるおちついた色調の上に、四部だけ作られた特製本にだけ使用された三方金を配し、渋味の上に華麗な感じをあたえている。

とにかく読んで行くうちに山岳地誌の文献的研究のヒントをあたえてくれるという意味でも滋味豊かなものである。座右の書として折りにふれてひもとき、山と人との長い流れを見出すことが出来る格好の書である。

（野上成勇）

本復刻版は装幀、内容、付録すべて元本と同じです。ルームで四千五百円（送料二百円）で発売しておりますからお申し込み下さい。

A L P S

—白川義員作品集—

大きな本である。27×36㎝。びっくりしたが、写真集はやはりこのぐらいな大きさがなくてはいけないのかもしれない。開くと広々とした美しさでアルプスの山々がせまってくる。作者得意の溶けた鉛を岩肌に流したような朝夕のものがやはりすばらしい。

ボソン氷河にて

『シャモニーの周辺にはすばらしい氷河がいくつかある。モンブランの帰途、山馴れた連中が下るボソン氷河。ここには稜線に丸ビルほどの氷塊があって、その一部が時々ハッパをかけたような大音響とともに崩れおち、丘のようになって氷河の上を流れる。こぶし大のものから数トンもあるような大きな氷塊までいろいろだが、どれも水晶のように美しい。危険は十分承知だ。セラックがふたたびこの地点に落ちて来たら助からないこともわかっている。しかし、どうしても逃げられないのだ。見事な被写体をそのままにしては逃げられないのだ。危険などという感情のなくなった心の真空状態である。この時初めて、私は山岳写真家の宿命のようなものを感じた』

ドロミテにて

『私は五月の初め、まだ残雪がうず高く積っている中をアウロンツオ小屋から、犬をつれてロカテリヒュッテまで日帰りで往復したが、その途中で足元から大きな雪崩が二度も起きた。雪崩を避けるために普通のルートでないところを歩いていたら、雪どけの下から直径十五㎝もある砲弾の大きな破片をみつけて小屋に持ち帰った。小屋の人の話では、登山者がしょっちゅう小銃の薬莢などを拾って来るということだった。』

◎

作品はシャモニー、ドロミテ、ベルナーオーバーランド、ヴァリス、チロルの順におさめられ、それぞれの章の終りに短かい紀行文が付され、最後にアルプス全図と作品の解説がある。

作者は言う。

『ここには私の青春がある。一枚一枚に私の青春の情熱と想いが込められている。評価はどうあろうと、ともかくこれは常に理想を高く掲げてどんな時にも豊かな心を持ちたいと一生懸命努力した私の青春の記録だと信じている。』

講談社発行。昭和44年刊。二〇、〇〇〇円。

（東）

会費納入のお願い　本年度会費未納の方がだいぶおられます。至急お納め下さい。東京、千葉、埼玉、神奈川在住者は三千円、地方会員は二千五百円です。

図書室便り

昭45・8

図書受入報告

学習研究社寄贈

(1)槇有恒著『ビッケルの思い出』（少年少女学研文庫　四一〇）昭和45

茗溪堂寄贈

(1)大島堅造著『山の古典と共に』昭和44

長野県山岳協会寄贈

(1)長野県山岳協会ペルーアンデス遠征登山隊報告書『ペルーアンデス遠征一九六七年度』昭和45

定期刊行物受入報告

〔部報・会報〕

(1)福島県山岳連盟『福島山岳』No. 2 45-8

(2)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 39 45-8

(3)京都山岳会『京都山岳』No. 543 45-8

(4)奥多摩山岳会『OMCレポート』No. 249 45-8

(5)東京野歩路会『山嶺』No. 489 45-8

(6)『札幌山岳倶楽部部報』No. 83 45-8

(7)日本自然保護協会『自然保護』No. 98 45-8

(8)日本山岳協会『登山月報』No. 17 45-8

(9)日本登山協会『山と雪』No. 148 45-8

〔雑誌〕

(1)『アルプ』No. 150 1970-8

(2)『地図』No. 30 45-6

(3)『岳人』No. 279 45-9

(4)『現代の探検』No. 1 45-8

(5)『HIKER』No. 179 45-9

(6)『岩と雪』No. 13～18 43-11～45-8

(7)『山と溪谷』No. 382, 384 45-7, 9

〔その他〕

(1)登山県教職員山岳研究会『ヒンズークシ踏査隊報告書　一九六九』昭和45

(2)千葉大学アフガニスタン調査隊『アリンガル谷とミール・サール　一九六六』昭和45

Journals Arrived in August in 1970

1. "Die Alpen", No. 6 Juni 1970 & No. 7 Juli 1970
2. "Die Alpen", Jahrgang 46, Quartar 2.
3. "Alpinismus", 1970-7.
4. "Der Bergsteiger", Jahrgang 37, Heft 7. Juli 1970.
5. "Federacion Espanola de Montanismo. Anuario.", 1969.
6. "La Montagne et Alpinisme", Annee 96, No. 77. April 1970.
7. "Österreichische Alpenzeitung", Jahrgang 88, Folge 1371. Mai/Juni 1970.
8. "Rivista Mensile", Anno 91, No. 5, 6. Maggio. & Giugno 1970.
9. "Senderos", No. 139. Junio 1970.

洋書受入報告

Hong Kong Mountaineering Club 寄贈

1. D.C. Reeve "A guide to rock climbing in Hong Kong", Everest Print. 1968.

地図受入報告

1. "Cordillera Branca (Peru), Parte Norte." 1 : 100,000
2. "Cordillera Branca (Peru), Parte Sur" 1 : 100,000
3. "Hindu Kush-Hindurai, Gakuch" 1 : 100,000
4. "Hindu Kush-Hindurai, Chiantar Glaciar" 1 : 100,000
5. "Hindu Kush-Hindurai, Blatt Darkot" 1 : 100,000
6. "Sikkim Himalaya" 1 : 150,000
7. "Garhwal Himalaya Ost" 1 : 150,000
8. "Hindu Kush Afghanistan, Munjun Region" 1 : 54,000
9. "Jongsang* Nupchu" 1 : 150,000
10. "Rataban & Kosa Gletsecher" 1 : 50,000
11. "Cordillera Branca (Peru), Südteil" 1 : 100,000

〔P・S・15〕

今年度の図書交換即売会の日が決まりました。十月二十四日（土）午後三時から五時です。前号の会報で出品をお願いしましたが、まだご連絡いただいてない方は大至急図書委員会宛お知らせ下さい。昨年にまさる盛会を持ちたいと思っています。よろしくお願いいたします。

（東）

会務報告

九月理事評議員会

（2日午後6時半本会ルーム）

▽出席者　三田会長、吉沢、深田副会長、中屋、藤井、山崎、丹部、野上、中島、神原、大森、松永、芳野、牧野内、川上各理事、島田、村山、金坂各評議員、大塚委員

▽議事

・エベレスト登山隊報告とエベレスト隊収支概要　（大塚）

アイス・フォールの状況が悪くルート工作に手間取り、その間シェルパの事故や成田隊員の急死などあったが、五月十一、十二両日松浦・植村、平林・チョタレの二隊が東南稜から登頂に成功した。事故がなければもっと早く登れたと思う。南壁はアプローチに雪

がなく、岩が現われ、落石が多く断念した。そのあと南壁隊を東南稜にまわし五月十九日を目標に行動を開始したが、悪天候のためこれも断念した。一部に伝えられた内ゲバなどなかったことを重ねて申し上げる。費用は第一次から三次まで約一億一千六百八十五万円くらいを要したが、九月半ばまでに正確な数字を出すことにしている。会員諸氏にいろいろお世話になったことをお礼申し上げる。

・毎日新聞社との接衝について　（村山）

エベレストの正式報告書を毎日新聞社で正式に引き受けてくれた。この財政的責任も毎日で持ってくれることになった。科学的データの整理には時間と費用がかかる。本会で成田隊員の弔慰金三百万円を支出したが、毎日、NHKにも出してもらうよう交渉している。

・財務委員会の件　（藤井）

財務委員として飯野、藤井、山崎、中島、丹部の諸氏を委嘱、担当理事を丹部常務理事とする。この件承認。

・年次晩餐会の件　（丹部）

十二月十二日（土）午後五時からマツヤ・サロンと決定、会費は二千五百円の予定。その前に支部長会議を開くことにする。

・山日記会員配布の件　（牧野内）

本年度の山日記残部二千部を全国の高校などに無料配布、また七十一年度の山日記を全会員に無料配布したいむね茗溪堂より申し込みがあり、茗溪堂としてはPRをかねて行ないたいとの意向なので、この件承認する。

▽報告

・ヒラリー卿来日の件　（神原）

七月下旬来日、万博で特別講演後立山と富士山に登り、会としては七月二十八日如水会館で歓迎レセプションを開いた。NHKからは富士登山のフィルムをもらった。レセプションと富士登山で約十三万円赤字が出たが、これはエベレスト勘定にしてもらう。

なお藤井常務理事より外国登山家の来日した場合の取り扱いについて、大規模なものでなく、ケースバイケースで考慮したいむね提案があった。

・ビナヤ氏来日の件　（藤井）

マナスル以来今回のエベレストでも非常に世話になったので、松方氏とも協議のうえ招待することになった。

・山岳の件　（中島）

六十四年を六月に発行し、六十五年は年度内発行を目指し準備している。表紙を固い紙にしようと検討している。二十六年から六十年までの総索引も原稿が出来たので茗溪堂と出版について話を進めている。

・大エベレスト展の件　（大森）

池袋西武百貨店、名古屋、福岡で毎日と共催で開いた。

・ネクタイ止めの件　（川上）

新しいデザインの会のマークのついた銀製ネクタイピンを五百本作った。

・明大チョー・オユー登山隊推薦状発行の件　（山崎）

チョー・オユーが許可された三十八峰のうちにはいっておらず、近く許可されるという情報もあるが、その時点で都岳連を通じ、日山協へ書類を提出する。

・日大ヒマラヤ隊登山目標変更の件　（山崎）

バウダ峰にかわりダウラギリ七峰に目標を変え、ネ政府からも許可がおりた。

改姓

六四七七　工藤紗千子　旧姓林

改名

六六九九　長谷川良典　旧名慈典

代表者変更

五二四二　山岳同志会代表小西政継

会員名簿訂正

三一ページ菊地徹は菊池の誤り

ルーム日誌（45年8月）

5日（水）常務理事会
11日（火）山岳編集委員会
12日（水）海外連絡委員会
18日（火）ゲルトルート女史歓迎会
20日（木）常務理事会
27日（木）婦人懇談会
八月中来室者　三〇四名　集会委員会

昭和45年度除籍者

左記の会員は、会費を昭和41・42・43・44・45年の五ヵ年間滞納のため、定款第十一条の規定により、本会台帳より除籍されました。復活ご希望の方がありましたら、その手続きをとられますようお願い致します。

二二七二　小林　黎子

二六三〇　松浦　謙助
四一九八　三尾　竜民
四四一二　小川のり子
四五六〇　渡辺　莞爾
四七〇五　寺谷　昌恭
五〇二六　山内　巌
五〇九二　五十島一晃
五〇九五　東京山猿の会
五二四五　岩田　武彦
五二七八　三上　公也
五四四二　小高　直
五四五六　堤　章
五六三九　角田　武夫
五七六九　務川　治
五八二九　峰岸孝一郎
五八五三　山田　勲
五八七六　碓井　徳蔵
五八八四　竹山　隆久
五八九〇　中里　実
五八九八　原田　雅弘
五九三五　秋元千江野
六〇〇七　杉本　定夫
六〇一九　下河辺史郎
六〇二〇　斎藤　健一
六〇七七　真下　健弥
五一〇一　菅　琢（北海道支部）
六一〇三　長谷川雄助（〃　）
五三八四　猪股　哲夫（宮城支部）
四一九六　矢内　志良（福島支部）
三七九七　三条高校登山とスキー部（越後支部）
四六一二　樋口　宗一（〃　）
四八六三　若井　芳彦（〃　）
五〇三〇　梅川　春男（〃　）
五一九四　樋口　房雄（〃　）
五二三三　大河原昭二（〃　）
五四四〇　早見　富男（〃　）
二二九三　山口　功（信濃支部）
四三九一　下平　春渡（〃　）
四四五四　山田平三郎（信濃支部）
五〇七七　穂苅　貞子（〃　）
五二〇三　太田　秀春（〃　）
五四二〇　田草川紀男（山梨支部）

五七八二　広瀬　昭人（〃　）
四八二一　吉田　政次（東海支部）
四八二二　宮崎　誠一（〃　）
五一六九　坂野　行雄（〃　）
五六一一　槌谷　祐七（〃　）
五六二三　大橋　典夫（〃　）
五九八二　高広　正一（富山支部）
二一二九　土田　新一（関西支部）
四六四〇　磯田郷一郎（〃　）
四六七一　三宅　康市（〃　）
四八六八　後藤　圭一（〃　）
四九六〇　上北　豊（〃　）
五四八八　佐々木健二（〃　）
五四九三　本多　昭夫（〃　）
五五九四　岡田啓二郎（〃　）
五一五三　中村　泰也（東九州支部）
六〇六三　鶴田　輝子

スミス女史歓迎会　カナダ山岳会バンクーバー支部長ゲルトルード・スミス女史が来日されたので、八月十八日午後六時半からルームで歓迎会を開いた。

第十一回登山技術講習会　初心者向き冬山登山技術講習会を十一月二十二日から二十四日まで富士山五合目お庭小舎で行ないます。定員三十名、費用約六千円。参加希望者は至急ルームまでお申し込み下さい。

あとがき　十月二十四日の図書交換会に多数会員の出席をお待ちします。

昭和四十五年十月十日発行
東京都千代田区神田錦町三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　山崎安治
（293）七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

☆会報製本御引受け☆
製本代　（251号～300号）金700円也
送料　別受け　金120円也
中林製本手帳株式会社
東京店・文京区水道2～15，電話（943）0311（代表）
大阪店・都島区相生町7，電話（352）3491（代表）
名古屋店・昭和区雪見町1～15，電話（731）7331（代表）
工場：大阪工場（堺市），東京工場（戸田町）
▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!
●貯蓄にもなります。
●万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。
御相談は　日本団体生命　へ
角筈支部（専門取扱営業所）
東京都新宿区角筈1の844　新光ビル内
電話（352）1556・1557

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

新刊　**日本の山旅**

足立源一郎スケッチ帖 <A変型208頁> 定価3,600円

日本列島の北から南までのさまざまな風景が著者の淡彩の筆によって、いきいきと描き出されているスケッチ集

私には後にも先にもたった一つの自分の山の本がある。「霧氷圏」、1941年版。先生の装幀がこの本を飾った。内容はつまらなくても、おかげでそれは生涯の記念碑となった。これも図々しく、お人柄に甘えて、ただで描いていただいたのである。絵に添えた先生の文章にも定評がある。力まず、てらわず、淡々として、しかも山の心に通じ、山の心をみごとに語っている。半世紀にわたる先生の山旅の収穫の一部が、いまこの本にまとめられた。これこそ、ほんとうに山にうちこんだ、ほんとうの山の画伯のすばらしい贈りものではないだろうか。

袋一平・山のアルバムより——

新刊　**山に忘れたパイプ**

藤島敏男著——————<菊判584頁>定価2,500円

登山半世紀をはるかに越える著者のよき時代の静かだった山旅から現在までの山登りの紀行を中心に収録。———

本書の内容は、随想、紀行、追想、訳章、書評、山のたより、登山譜、の七つからなっている。その一つ一つをここに説明する余裕はないが、大正期からつい最近まで、主として日本山岳会の刊行物に発表されたものが大部分を占め……著者は「だいたい私は我儘者だから、依頼だの注文に応じて文を綴るのは、平にご勘弁を」と言っているように、本書の大部分を占める文章は、書きたいことを気のむいた時に書いたもので、それだけに、どの一つをとり上げても、この著者ならではの感を強く受けるものである。

望月達夫・藤島さんの本より——

登山・スキー用具専門店

山の店

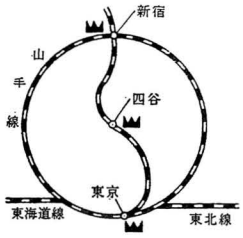
大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い山の店
●北へ来たら山の店
●フレッシュな山の店

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社たかはし

なるべく なんにも
持たない方がいい
けれども、どうしても
要るものがある、
なにしろ人間ですから
そして登山ですから

どうしても必要なもの
をこしらえて売る
責任はもっています

かたろぐシンテイ
でんわ 281～8456
中央区・八重ス4の1

秀山荘

登山とスキー具
プライス
リスト進呈

イワタ

東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘